

〔 9 〕 関連病院の施設紹介、留学便り、開業報告

独立行政法人国立病院機構 七尾病院

当院にとって、2007年最大の出来事は3月25日午前9時42分に発生した能登半島地震です。能登地方では400年ぶりの大地震とのことであり、漠然と持っていた安全神話が一瞬にして崩壊したのです。幸い病院の物的被害は少なくすみ、建物の壁や床に新しい亀裂が何個もできたと事務の人は指摘しますが、もともとたくさんあった古い亀裂と素人目で判別するのは困難なくらいです。発症時刻が休日とは言え日勤帯であったことも不幸中の幸いでありました。一部気管チューブがはずれたり呼吸器が倒れそうになったりしたとのことですが、スタッフが機敏に対応し事なきを得ました。

地震の教訓の一つは連絡網の問題です。電話は携帯を含め数時間にわたって機能せずテレビだけが情報源となりました。事前にある程度以上の震度の場合、病院に駆けつけることを（最低限自分の食料をもって）マニュアル化し周知徹底しておく必要を痛感しました。

明るい話題としては施設整備計画が具体化しそうなことです。施設の老朽化、結核患者の減少に対応するものですが、結核医療、重症心身障害児（者）医療と並んで神経難病を計画の柱の一つとしており、神経内科が期待されるころは大です。これまで以上に医局からのご指導ご鞭撻をお願いしたいと思っております。なおこの場をお借りして地震の際に暖かい励ましのお言葉を頂いたことを深謝いたします。

（横地 記）

富山市民病院

富山市民病院は、昭和20年8月1日の大空襲により、全富山市が壊滅した、その翌年の昭和21年2月に、富山市の保健衛生施設として、大手町に創設されました。その後、昭和29年に五福に分院が開設され、昭和58年に本・分院を統合して現在の新病院となっています。国道41号線沿いの交通の便が良い場所に立地しています。現在、病床数626床、23診療科を持つ地域中核総合病院として、市民の保健・医療・福祉を担っています。日本内科学会認定専門医教育病院、日本神経学会教育関連施設、日本脳卒中学会認定研修教育病院など、各種研修認定も受けています。

神経内科は、医師2人で、内科の1部門として診療に携わっています。外来は、毎日専門外来を開いています。内科一般業務として、脳ドック、日中救急、富山市輪番救急なども分担しています。病棟は、脳神経外科との混合病棟で、病床数は約20床+ α です。脳血管障害が多く、脳神経外科と協力しながら、診療にあたっています。意識障害、頭痛、めまいなど救急外来からの呼び出しも多く、神経救急医としての役割も重要です。

富山市民病院のホームページ <http://www.tch.toyama.toyama.jp/> も、ご参照下さい。

(林 記)

独立行政法人国立病院機構 医王病院

2007 年は、当院にとってさまざまな変化のあった年でした。メインイベントを 3 つご紹介します。

1. 臨床研究部（院内標榜）設立

1 月に臨床研究部が設立されました。神経・筋病理、神経・筋治療、呼吸器障害治療、小児精神科的疾患治療、医療情報処理の 5 つの研究室があります。そして、神経・筋病理研究の一環として剖検室が整備されました。残念ながら 2007 年にはこの部屋での剖検はありませんでしたが、2008 年にはいり、剖検第一例がありました！今後 Brain cutting, CPC などは、他病院の先生方にもご参加いただけるよう計画してゆく予定です (BC, CPC 案内のメール配信ご希望の先生は、cishida@ioudom.hosp.go.jp まで)。

2. 新病棟の工事

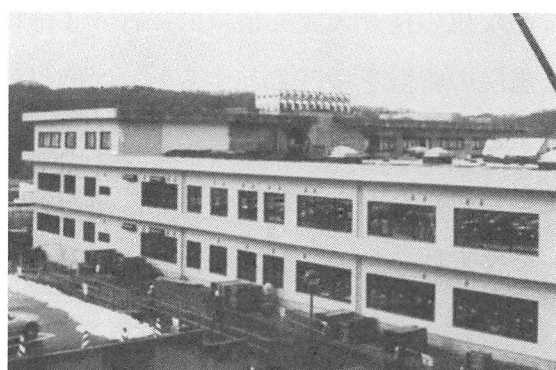
金沢若松病院の合併時に建てられた第 3 病棟の、上やや北側に、新病棟建設がすすんでいます。写真はモノクロでわかりませんが、外壁全体はうぐいす色で、ミカン色（黄でもオレンジでもない）の横ラインが 2～3 本はっています。山側環状線からも見えますのでご覧下さい。2008 年 4 月下旬には、引っ越しの予定で、ただいま準備に追われています。綺麗になりますよ！医王病院は！！

3. 電子カルテ導入

約 1 年間の準備期間を経て、12 月 3 日より本格導入されました。どうして医王病院みたいな小さな病院に必要なの？！とも思いましたが、ようやく、スタッフもなれてきて、まあ、案外使ってみると便利なことも多いです。データが少ないからか、ソフトがそれほど高価でなくても我慢できるスピードです。いよいよ、MR さんから供給されるボールペンも使い道がなくなってきました……。



↑剖検台。不要になった国立病院機構の某病院からのいただきものですが、かなり綺麗です。床は水はけが悪いので、見学者もゴム長靴必須！！



↑新病棟工事中。ちょっと玄関（外来、薬局、放射線あり）から遠くなるのが心配ですが……

2007 年 3 月までは、駒井清暢特命副院長をはじめ 5 人の神経内科スタッフでしたが、4 月からは 6 人となりました。しかし、他病院からのご紹介もあり、週に数人は新入院があるという状態で、約 130 人の入院患者の治療にあたっています。ますます病院間、病診連携が重要になってきておりますので今後ともよろしくお願い致します。

（文責 石田千穂）

公立能登総合病院

公立能登総合病院は七尾市と鹿島郡中能登町の1市1町で構成された七尾鹿島広域圏事務組合が運営する自治体立病院です。診療科24科で診療を行っており、病床数は434床（うち精神科100床）です。常勤医は37人ですが、年々減り続けており（神経内科も例外ではありませんが）、地方における医師不足を十分に体感できる病院です。

神経内科は常勤1名、非常勤1名（水曜日のみ）で外来、入院業務、訪問診療（ALS 2名、FAP 1名）を行っています。その他の仕事として、田鶴浜高校の講義、国際医療福祉専門学校の講義（別に給与がもらえます）も依頼されて行っています。

外来は月曜から金曜までの毎日行っており、20～30人程度の再診に、予約外再診と新患の合わせて3～10人程度を診療します。8時30分から16時頃まで一日中外来にいることも稀ではなく、検査などの時間が十分とれないことが悩みの種です。

入院は定数17床で、患者数は10人前後のことが多いですが、時に20人を超えることがあります。5階東病棟と急性期患者が入る救命センターが主な病棟になっています。

疾患としては脳血管障害が圧倒的多数を占めます。脳外科医2名と脳神経系のon callを担当しており、脳出血やクモ膜下出血であろうと、手術適応がないと判断された場合は担当しています。ただ、当院は能登地域において神経内科的な検索が行える数少ない病院の一つ（石川県内でもその様な病院は少なくなってきましたが）ですので、神経変性疾患や筋疾患の検査入院も積極的に行うようにしています。

当院の特徴を挙げるとすると、医師以外の職種の方々がとても協力的であり、医師としてとても働きやすい環境であることです。特に事務の方々、看護師の方々には色々と助けていただきながら何とか毎日の診療を行っています。

今後も能登地域における中核病院として頑張っていきたいと考えています。

（文責 坂井）

石川県立中央病院

当院の特徴は、金沢大学病院、金沢医科大学病院、公立能登総合病院と並ぶ3次救急病院である他に、ガン拠点病院、HIV 拠点病院など地域医療を支える第一線拠点病院と位置づけられております。普段は、能登や加賀からも患者さんが自発的或いは紹介されて来られることで感じるのですが、2007年は3月末に能登地震があったことで、改めて「県立中央病院」であることを実感することができました。医療スタッフの派遣はもちろん、積極的な入院患者の受け入れの他、公的宴会も自粛の憂き目に会い、送別会・歓迎会が中止されてしまいました。特に去られた方にとっては、何かもの足りない移動の季節ではなかったかと思います。

先に述べたように、当院では3次救急病院と言うものの、1次を始めとする救急・時間外患者さんは伝統的に多く、病院では2007年4月から救急診療を救命救急科として独立部門として対応しており、院内医師の負担軽減にかなり寄与する事になりました。神経内科救急も、ある程度対応してくれ、救急部の先生にはホント助けられており、この場を借りてお礼申し上げます。もちろん、tPA など専門的診断・治療を要する場合もありますので、当科に限らず各科で対応医師を決めております。よって、マンパワーがものを言うわけです。10月に、院内の信頼も厚かった沖野先生が御開業のため去られ、12月まで小生と柳瀬先生の2人体制となり、この時点で内科他科と比べ最小人員となりました。しかし患者さんは内情を知るはずもなく、毎日新たな方はやって来ました。大学からの診療応援を得、外来患者を地域の先生方をお願いし、研修医の先生には口頭指示で動いてもらい等などで、幸い大きな事故もなく何とか乗り切りました。そう、研修医の先生が多数がおられるのも当院ならではの、もちろん研修なのですが、貴重な戦力ともなっていることもまた事実です。皆熱心で、いつもこの中から自分たちの仲間が生まれないかと、当科での研修中はそれなりに配慮しているのですが、なかなか目立った成果が得られていないのが現状で、今後の課題でもあります。同門の先生方、これからもよろしくお願いいたします。

(文責 山口)

UCLA 留学 便り

2007年4月よりカリフォルニア大学ロサンゼルス校（以下UCLAと略）医学部神経学教室へ留学させていただいております。

まず、ロサンゼルス（以下LAと略）を紹介させていただきたい。LAは、皆さんご存知のとおり、アメリカ合衆国カリフォルニア州最大の都市であり、人口は3,844,829人（2005年）で全米2位の規模です。見所は、一言で言うと全ての楽しみを満足させてくれることでしょうか。テーマパーク関係ならユニバーサルスタジオ（まさにBack to The Future）、ディズニーランド（やっぱり、元祖アナハイムのディズニーは全てが夢の国、LA市民は割引あり）、ナッツベリーファーム（スヌーピー発祥の地）、レゴランド（だれもが少年少女時代にもどれます）があり、どれもがそれぞれに特有の楽しみかたができます。さらには映画好きならハリウッド（チャイニーズシアターなど）、買い物好きならビバリーヒルズ（ロデオドライブ）、スポーツ好きならドジャースタジアム（いまや不動のクローザー斉藤隆に加えて今年より広島のエース 黒田が加入）とエンゼル・スタジアム（Ichiroを見たいならここ）、ステープルスセンター（NBAのレイカーズ、クリッパーズの本拠地）、広大な太平洋をみただけで、サンタモニカ（遊園地の吹き抜け観覧車はおすすめ）とあげれば、きりがありません。

次にUCLAを簡単に紹介させていただきます。1919年創立のUCLAは、アイヴィー・リーグを含む東海岸の名門私立大学や同じカリフォルニア州内のスタンフォード大学に並ぶ名声を誇る米国屈指の名門州立大学です。3万人を超える学部・院生が在籍し、ノーベル賞、フィールズ賞、ピューリッツァー賞など、数多くの分野で実績をあげ、各学会に於けるその権威、知名度は絶大です。大学院はほぼすべての分野に於いて全米トップ層に位置し、ここの医療センターは全米トップ3、西海岸一にランクされています。UCLAは1998年より最も入学志願者の多い全米一の「人気大学」で、2007年秋学期へは教養学部・第一学年4000人のスペースに50729人が出願しています。

また、スポーツも大変盛んで、Bruins（ブルーインズ）は、2007年現在、全米チャンピオンシップで121回、NCAA（全米大学スポーツ連合）で100回優勝しており、これは全米で最多です。UCLAのキャンパスが広いことも有名ですが、現在は163個の建物が1.7キロ四方の土地に広がっています。大学のキャンパスには芝生、銅像ガーデン、噴水、博物館などがあります。キャンパス自体はウェストウッドにあり、ビバリーヒルズやブレントウッドに隣接しており、ここの地区は最高学区となっています。銅像ガーデンは全米で最も美しいガーデンと評されており、その美しい景観から観光名所として世界各国から訪れる人もいたり、映画の撮影としても使われることも多いです。

最後にラボと小生の状況に関して紹介させていただきたい。ここのラボは、我らがボスDavid B. Teplow（以下Teplow）と彼がHarvardから連れてきたGal Bitanの2人がそれぞれにポストク、学生をもってグループをつくっており、2つのグループあわせて総勢20名ほどの人たちが同じ実験スペースを使ってアルツハイマー病 β -アミロイドの実

験をしています。Meeting は Group 別の Meeting と Joint Meeting が隔週であり、グループ間の垣根は全くありません。

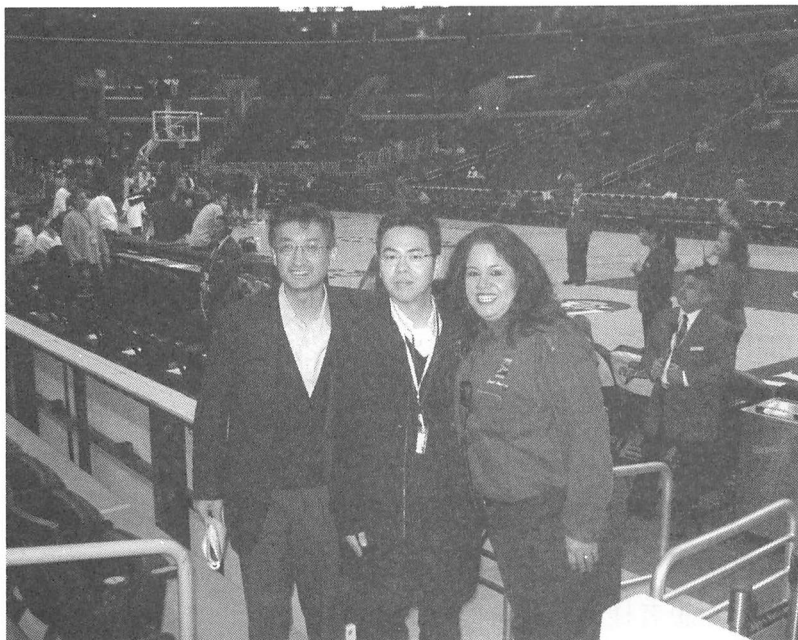
留学前は米国の研究室は9時－5時で土日はしっかり休み、夏休みもたっぷり取れると思っていましたが、すぐに大きな勘違いであったことに気付きました。みなさんとてもがんばっていて、この競争社会こそが強いアメリカを支えているのだと身にしみて実感しました。最初の半年間は、英語力不足も影響して全く実験できず、毎日、UCLA のおいしいレストランをひとつひとつクリアーして自宅で家内におすすめメニューを報告するのが日課でした。次の3ヶ月間でやっと自分の実験スペースがあたり、首から下を使って実験のふりだけはできるようになりました。そして、今年になり、やっと少しは頭が働くようになりました。もっとはやく気づいていればと後悔先に立たずのことが多い日々です。ただ、ボスの Teplow は、そんな小生を理解してくれて、明らかに実験知識や手技は他のボスドクより劣っていますが、辛抱強く見守ってくれています。

この夏には山田先生やアミロイドグループのメンバーが遊びにこられるとのことでそれまでにひとつでも結果をだしておきたい今日、このごろですが、この夏だけは、しっかり夏休みを頂く予定で Teplow も OK を出してくれています。

最後に今回の留学を応援してくださった山田先生をはじめとする金沢大学神経内科医局の諸先生方に感謝して終えたいと思います。

なお、添付の写真は昨年11月に順天堂大学の望月先生がラボに見学にこられたときにいっしょにステープルスセンターに NBA を見に行ったときに写真です。やっぱり、レイカーズは、最高でした！

小野 賢二郎 拝



開 業 報 告

このたび2007年10月に「おきの内科医院」を開業いたしました。金沢大学神経内科同門では多分8、9番目の開業です。新米の自分ですが同門会から贈呈いただいた時計のお礼も兼ねて、経緯や現状などを簡単に記したいと思います。

1. 何故開業か？

日本中で急速に進行した(?)医師不足の昨今、とりわけ金沢大学神経内科の医局員もギリギリの状況で開業することは、別に悪いことをするわけではないのに非常に後ろめたい感覚がありました。開業の動機はたくさんありますが(詳細は下記ホームページに記載)、勤務医の立ち去り型サボタージュのような気分はなく、自分の意識としては挑戦的開業です。何よりも地域における「神経内科」のかかりつけ医という部分をアピールしたいと考えました。介護保険、在宅推進、メタボリック症候群、後期高齢者制度など現在の医療のキーワードに関して、神経内科ほど密接な分野はないのではないかとさえ思います。その真価は地域でこそ問われるに違いなく、ある意味で大きな責任感も覚えます。

2. 開業準備とスタート

土地・建物・医療機器他、多くの準備がありましたが、最も重要なのは医院のコンセプトや理想に sympathy を感じてくれるスタッフです。勤務医との最大の差異は、事務・経営・労務管理から薬・医療器材の管理まですべてを把握する必要があることですが、それ以上にスタッフの気持ちをまとめるのが大変です(しかも若い女性ばかりなので、結構前向きな自分でも気を使いますし、こう見えて意外と孤独感を味わっています...)。勤務医時代はいかに周囲のサポートを受けて医療行為だけに専念できていたかを思い知らされた感じです。

3. 診療の状況

当初は無我夢中でしたが、再診の患者様が増えるにつれて家族背景や生活状況を理解し、じっくりと話が聞けるようになってきました。1家系に多数の受診者がいる家族もできてきて、遺伝性神経疾患ほどではなくても種々の病気を近似した genotype をもつ人達単位でとらえるようになりました。世の中にはこんなにも高血圧や糖尿病がいたのかというのも実感で、これでは stroke が減るはずもないと思いました。12月にワクチン接種とノロウイルスブレイクが重なったときは新米開業医には不可能に近い受診者数がありましたが、忙しくても何とか患者様の本音を聞けるように意識して診療しています。予想どおり、話を聞いてもらって不安が解消したと言われる人は少なくありません。めまいや頭痛、し

びれ、脳卒中、認知症など神経内科疾患の比率も生活習慣病について多い印象です。一方でGPとして広範な知識と学習も要求され、毎日時間が足りない状況が続いています（医師会活動や講習会も多く、睡眠時間も休日も明らかに勤務医時代よりも減少してしまいました）。

ということで、まだ駆け出しで見えていない部分が多いのですが、当初の動機を忘れずに挑戦し続ける姿勢でいきたいと思います。大学や病院とはまた異なる地域の神経内科診療を研修医や医学生にもみてもらえるような形にできるようにしたいものです。

医院からは日本海も垣間見えて、5分あまり歩くと波打ち際に行けます。機会があればぜひお立ち寄りください。

（おきの内科医院 <http://www1a.biglobe.ne.jp/okino-mc/> 沖野 記）



[10] 金沢大学大学院脳老化・神経病態学（神経内科学） および金沢大学医学部附属病院神経内科名簿

（2007年1月から12月現在）

教 授	山 田 正 仁
准教授	岩 佐 和 夫
保健管理センター教授	吉 川 弘 明
講 師（医局長）	吉 田 光 宏
助 教（外来医長）	高 橋 和 也
助 教（病棟医長）	浜 口 毅
医 員	室 石 豊 輝
大学院博士課程	古 川 裕
大学院博士課程	坂 井 健 二（3月修了）
大学院博士課程	篠 原 もえ子（3月修了）
大学院博士課程	佐村木 美 晴（6月修了）
大学院博士課程	本 崎 裕 子
大学院博士課程	浜 口 歩
大学院博士課程	野 崎 一 朗
大学院博士課程	町 谷 知 彦
大学院博士課程	森 永 章 義（福井大学・国内留学）
大学院博士課程	島 啓 介
大学院博士課程	能 登 大 介
大学院博士課程	池 田 芳 久
大学院博士課程	池 田 篤 平
大学院修士課程	小 瀬 健 治
海外留学	小 野 賢二郎（UCLA）
研修医	河原 庸介（4－6月）
クリニカルクラークシップ	高瀬 史明（4－5月）
名誉教授・非常勤講師	高 守 正 治
非常勤講師	垣 塚 彰（京都大学教授）
臨床教授	駒 井 清 暢
臨床准教授	新 田 永 俊

臨床准教授	沖 野 惣 一
臨床准教授	石 田 千 穂
臨床講師	坂 尻 顕 一
臨床講師	山 口 和 由
診察協力医	山 川 祐 賀子
診察協力医	松 本 泰 子
診察協力医	篠 原 も え子
協力研究員	横 地 英 博
協力研究員	丸 田 高 広
協力研究員	柳 瀬 大 亮
協力研究員	佐村木 美 晴
協力研究員	廣 畑 美 枝
協力研究員	坂 井 健 二
協力研究員	枝 廣 茂 樹
薬学部大学院	吉 川 弘 毅
薬学部大学院	高 瀬 文 超
薬学部大学院	稲 岡 義 浩 (3月終了)
薬学部大学院	深 澤 秀 一 (3月終了)
薬学部大学院	梅 下 翔

検査技師	山 口 ゆかり
検査技師	角 田 由美子
心理士 (産学連携研究員)	堂 本 千 晶
臨床心理士 (産学連携研究員)	柚 木 颯 偲
臨床心理士 (産学連携研究員)	鈴 木 絵里子 (3月まで)
心理士	本 田 こず絵

教授秘書	辻 口 悦 子
事務員	中 田 理 砂
事務員	澤 田 和 子
事務員	米 原 洋 子
事務員	蔵 谷 久 美
事務員	木 村 美智子 (8月から)

編集後記

2007年は、地球環境問題として温暖化が叫ばれていました。私が子供の頃は、「学研の科学」などという雑誌を講読していましたが、その中で当時は地球が氷河期に向かっているのではないかなどという学説が注目されていたような気がします。アル・ゴア氏が「an inconvenient truth」でアカデミー賞受賞式に出席し、肥満体を揺らしてはしゃいでる姿を見た時、“不都合な真実”を見た気がした私は、その後、ゴア氏がノーベル賞まで受賞したと知りイグノーベル賞の間違いではと考えてしまいました。100年後の気候変動を心配する人間のシミュレーション能力には、感動して開いた口が塞がらないが、20年後には、どんな学説がもてはやされているのか興味をもたれるところです。少なくとも日本はこれから少子高齢化で人口も減っていくようですから、二酸化炭素の排出も減り、地球環境にやさしい国になっていくに違いありません。

個人的には、3月にカリフォルニアから日本へ戻り、4月から金沢大学神経内科の医局長の大役を仰せつかり、6月には父親が他界し、バタバタしている間に12月になり、これまた初体験の金沢大学神経内科同門会の世話人も皆さまの暖かいご協力のおかげで、無事執り行う事ができました。皆さまの2007年はいかがだったでしょうか。齢を重ねるごとに、時が経つのを早く感じるようで、私にとっての2007年はこれまで以上にアッという間に過ぎ去ってしまいました。

新しい年は、2008年度の医局人事と2007年の年報作成で慌しくスタートいたしました。年報作成に当たって、各医長、各係りの医員・大学院生、関連病院の各先生方、事務の方々、そして最終校正にあたり山田教授をはじめ多くの方々の尽力の賜物で、毎年年報が出来上がっていることを改めて認識し、皆で何かを創り上げていく楽しさを少し感じることができました。

2007年年報が、金沢大学神経内科の皆さまの区切りとなり、また2008年の次のステップへの足がかりとなれば幸いです。

最後に、業績の編集にあたり十分校閲いたしましたが、誤字脱字・掲載漏れなどあるかも知れません。これらの誤謬につきましてはこの場をかりてお詫び申し上げます。

(医局長 吉田 光宏)

金沢大学 神経内科 年 報 第8号(2007)

2008年3月25日 発行

発行： 金沢大学大学院 医学系研究科 脳医科学専攻
脳病態医学講座 脳老化・神経病態学(神経内科)

〒920-8640 金沢市宝町1-3-1

TEL(076)265-2292 FAX(076)234-4253

<http://web.kanazawa-u.ac.jp/~med19/>

印刷： 笠井印刷所

金沢市旭町2-3-17 ☎076-232-0052
